

## すける物思ひ

伊勢物語第四十段の末尾に標題のような言葉が見える。この言葉を中心に、この章段について少し書いてみることにする。まず全文を掲げる。

むかし、若きをとこ、けしうはあらぬ女を思ひけり。さかしらする親ありて、思ひもぞつくとて、この女をほかへ追ひやらむとす。さこそいへ、まだ追ひやらす。人の子なれば、まだ心いきほひなかりければ、とどむるいきほひなし。女もいやしければ、すまふ力なし。さる間に思ひはいやまさりにまさる。にはかに、親、この女を追ひうつ。男、血の涙を流せども、とどむるよしなし。率<sup>ゑ</sup>ていでていぬ。男、泣く泣くよめる。

いでていなば誰か別れのかたからんありしにまさる今日はかなしも

とよみて、絶え入りけり。親あわてにけり。なほ、思ひてこそいひしか、いとかくしもあらじと思ふに、しんじち真実に絶え入りにければ、まどひて願たてけり。今日の入相ばかりに絶え入り

て、またの日の戌の時ばかりになん、からうじていきいでたりける。昔の若人は、さるすける物思ひをなんしける。今の翁、まさにしなむや。

末尾の「昔の若人は」以下は、真淵が『伊勢物語古意』で、「此昔の云々より記者の詞也」といつているように、作者の立場でなされた批判の詞ととるべきであろう。その点、第一段で、元服したての若者が、平城の京春日の里でかいま見た女はらからへの心地の「まどひ」を、「かすが野の若紫のすり衣しのぶのみだれかぎりしられず」の一首に託して詠んでやった所業に対して、作者が、「昔人は、かくいちはやきみやびをなんしける」と評した筆法に似ている。伊勢物語に三段階の成立過程を見ようとする近來の学説に従うと、どちらも第二次伊勢物語成立の際に新たに付加された章段の内に入る。第一段と第四十段との間にこのような類似を見ることは、作者の姿勢を考へる場合、重要な示唆を与えてくれるように思う。第一段においては、作者は、「昔人」の「いちはやきみやび」を顕彰するにとどまっているのに対して、第四十段においては、「昔の若人」の「すける物思ひ」を賞揚する機会に、それをする能力を失った「今の翁」を引き合いに出した形になっているところが、異なっている。ただし、前者においても、「昔人は」とあるところから、言外に今の世の人に、そのような行為の見られないことを嘆く趣が暗示されていると見るべきであろう。ただ後者で、「昔の若人」と「今の翁」とを対照的に持ち出した点は、その解釈のうえで、古來論を呼ぶところとなっている。

折口信夫氏は、その著『伊勢物語』で、古今集卷十七雑上に入る、「題しらず」「よみ人しらず」の歌のなから、

今こそあれ我もむかしはをとこ山さかゆる時もありこしものを（八八九）

いにしへの野中の清水ぬるけれどもとの心をする人ぞくむ（八八七）

世の中にふりぬる物はつのくにのながらのはしとわれとなりけり（八九〇）

すける物思ひ

の三首を引用したつづぎに、「じいさんのたかぶった歌、年寄りのプライドを示した歌が並んでいる。じいいの自慢するときがあって、その話しぶりがここにはいってきいている」としておられる。「ここ」とは、今問題にしている第四十段の末尾の個所をさす。折口氏のこのような言い方には、充実した青春を持った人にしてはじめて、その人の老年のプライドは保証されるはずだ、それがなくての「じいいの自慢」は、嘆老の裏返しとしての空威張りにすぎない、という余意があるようである。老人が「年寄りのプライド」をもって自慢するのは、むろん若者を前にしてである。「話のついでに、いまのやつはだめだ、というとき、ひょっと、翁という語がはいってくる」、言いかえれば、「いまのやつはだめだという話になってゆくという」と、そっちのほうからお迎えがいて、こういう形に整ってゆくのだ」と、折口氏は、氏一流の説明の仕方をする。伊勢物語におけるこの間の呼吸を真淵は、「さる事文のいきほひぞかし」と、至極当り前のことのように受

けとめている。

このような語り口は、むしろ作者の偽装である。『和歌知頭集』（島原文庫本）が、「むかしのわかき人は、なりひら、いまおきなといふも、なりひらのこと也。わかよりしむかしは、かくいろくしかりき。いまは、よも、かくはあらじといふことば也」といつているように、ここへ業平の実像を押し当てたとしても、この事情は変らない。偽装であるがゆえに、かえって作者と同時代の「若人」への鋭利な批判がうかがえるというものである。そこたら、『伊勢物語思見抄』（一条兼良）のように、「今の世の人は、物思ひをして身をうしなふ程の事はせぬ也。わかき人をも心おとなしきをば翁といふなり」と、一歩進めた解釈も可能となってくる。

ここで、第二次伊勢物語となるために編入された諸段の作者の問題が浮び上がってくる。これについては、この作品の成長過程を、第一次・第二次・第三次と三段階に想定すること自体に、なお十分な具体的検証が遂げられていない現在、決定的なことはいえないが、業平的人間とそ生き方に強い憧憬をいだく業平周辺の後人か、同じく在原氏一族のなかのなにびとかであったのではないかとするのが、最も穏当な推定であろう。そしてその時期は、片桐洋一氏もいわれるように、一応後撰集成立後間もないころと考えておいてよからう。

さて、「昔の若人」がしたという「すける物思ひ」とは、具体的にどのような内実を持つものであろうか。

まず、「すける」の「すけ」は、「すく」という動詞の已然形である。「すく」は、『岩波古語辞典』によると、「氣に入ったものにむかって、ひたすら心が走る。一途になる。熱中する」とあり、これは第一義と云つてよいが、男女間の愛情に限定されると、「恋に走る。色恋に熱中する」となる。伊勢物語には、「すく」と、この語の名詞形「すき」を含む「すきごと」「すきもの」とを合わせて四例見えており、これらの「すく」「すき」は、すべて男女間の愛情の意に用いられている。「すき心」の「すき」も、王朝ではこの意に用いられているものが多い。したがつて「すき心」は、恋に走る心ということになり、これはまさしく情念と呼ぶにふさわしい特性を具えた心理現象ということが出来る。情念はもともと盲目であるがゆえに、必然的に、奈落へ向かう危険な契機を内部にひそめ持つことになる。

つぎに、「物思ひ」の「思ひ」、さらに溯つて動詞「思ふ」についても、『岩波古語辞典』の「おもひ」の項に、行き届いた基本的な解説が見えるので、それを左に転記する。

オモ（面）オヒ（覆）の約か。胸のうちに、心配・恨み・執念・望み・恋・予想などを抱いて、おもてに出さず、じつとたくわえている意が原義。ウラミが心の中で恨む意から、恨みを外にいう意をもつに至るように、情念を表わす語は、単に心中に抱くだけでなく、それを外部に形で示す意を表わすようになることが多いが、オモヒも、転義として心の中の感情が顔つきに表われる意を示すことがある。オモヒが内に蔵する点に中心を持つて対し、類

義語コロコは、外に向つて働く原動力を常に保っている点に相違がある。

この解説を心において、第四十段を見ると、物語はまず、「むかし、若きをとこ、けしうはあらぬ女を思ひけり」から始められる。「けしうはあらぬ女」とは、主として容姿の方面からいつたもので、不美人とはいえぬ女、尋常の女という意であろう。「女もいやしければ」とあるので、身分は召使でもあつたらうか、その女が王家の若い御曹司に思われたことになる。そこに「さかしらする親ありて、思ひもぞつく」とて、この女をほかへ追ひやらむと」するのである。「もぞ」は、好ましからぬことが将来おこることを予想して、危惧・懸念する意を表わす助詞であるから、「思ひもぞつく」は、女に対する「思ひ」——恋慕の情が、息子の身に固着して離れなくなるのではないかと心配して、の意となる。わが子が愛執の囚となることへの、世間並みの親の危惧を表わす。上からの関係でいえば、このようにとつてよさそうであるが、同時に息子に対する「思ひ」が女の身に着いて離れなくなることを懸念する意もこめられていると見てよからう。親がこれほどまでに息子の将来を危惧するのは、そのためであろう。ここに早くも二度現われた「思ひ」（一つは動詞、もう一つは名詞として）は、すでに「胸のうちに……を抱いて、おもてに出さず、じつとたくわえている」状態にとどまることができないで、それが顔に現われたことを意味する。そうでなければ、親が息子の恋慕の事実気づくはずがないからである。

親はこの女を追放しようとするが、実行には及ばないままためらっていることが、「さこそい

へ」の表現から察せられる。男は親の心の動きをさとしたものの、親がかりの身で、まだ自己を通ず氣力がないため、女を引き止めることができない。女も召使という賤しい身分のことで、主の意志を拒む力を持たない。親と主の絶対の權威の前には、若い男女は文字通り無力であった。「さる間に、思ひはいやまさりにまさる」ほかなかつた。この「思ひ」は、文脈のうえからいっても、明らかに男女二人のものであつた。それを見て取つた親は、急に女の追放を決行する。男は血の涙を流して嘆くが、それでも引き止めるすべがない。親の嚴命で、人が女をつれて出ていった。男が「泣く泣くよ」んだ「いでていなば」の歌は、非力なものに許された最後の抵抗としての自己表白であつた。しかし渾身のわざであつたために、詠み終えたとたん、男は息絶えてしまったのである。親はあわてて、「なほ、思ひてこそいひしか、いとかくしもあらじ」(やはり自分、息子のことを心配したからこそ言つたのだ、まさかほんとに息が絶えることなどあるまい)と思つていたので、真実になつて了つたので、途方にくれて、蘇生の願を立てた。そのかいあつて、二十四時間あまり経つてやつと息を吹き返したのであつた。

「若きをとこ」と「けしうはあらぬ女」との悲恋物語は、ここで終る。「昔の若人は、さるすける物思ひをなんしける。今の翁、まさにしなむや」は、このような昔の若者の恋のあり方と今のそれとの対比のうえになされた批判である。「すける物思ひ」は、一途に恋に走る「物思ひ」をいう。しかし、「思ひ」であつて、「外に向つて働く原動力を常に保っている」「心」とちがうとこ

るから、外部の規制に対しては消極的な反応の仕方しかできない。したがって、「思ひ」が「いやまさりにまさる」につれて、外に向かう力の発動を見ることがなく、「思ひ」はひたすら内向するばかりで、果てはそれが肉体まで冒し、「絶え入りにけり」という所まで至る。これが「思ひ」の宿命であった。万葉集以来、歌語としては、「思ひ」の「ひ」に「火」を掛けることが多い。まことに「思ひ」は火と燃えて、肉体を焼き亡ぼすことがあったのである。まさしくそこに青春のあかしを見た作者は、「今の翁云々」という言い方で、その見られなくなった現代を痛烈に批判したのであった。

(五五・一)